2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**日本語を話す 2L1 バイリンガルのスピーチ・プロダクション －異なる言語間の相互作用とバイリンガル言語発達に関する研究－**
キーワード	①2L1 バイリンガル、②相互作用、③言語発達

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	リュウ　サ 劉　莎
配付時の所属先・職位等 （令和 7 年 4 月 1 日現在）	福岡工業大学教養力育成センター　助教
現在の所属先・職位等	福岡工業大学教養力育成センター　准教授
プロフィール	言語音声学を専門とし、バイリンガル話者や異なる言語背景を持つ話者の音声特徴について研究している。実験音声学や統計分析を用いながら、言語習得やコミュニケーションに関する理解の深化を目指している。研究成果の国際的な発信に加え、教育活動を通じた社会への還元にも取り組んでいる。

1. 研究の概要

本研究では、日本語を話す 2L1 バイリンガルの成人および 7 歳から 12 歳の児童を対象とし、モノリンガル話者との比較を通じて音声産出の特性を明らかにする。具体的には、母音・子音・アクセント・リズムに着目した音響分析に加え、統計分析を用いて言語間相互作用の有無とその程度、ならびにバイリンガル特有の特徴および発達過程を分析する。これにより、バイリンガル音声産出の仕組みを体系的に捉えることを目指す。

2. 研究の動機、目的

近年、二つの第一言語を持つバイリンガル（以下、2L1 バイリンガル）のスピーチ・プロダクションに対する関心が高まっている。しかし、その包括的理解にはさらなる詳細な調査が必要である。特に、言語間相互作用の有無については相反する結果が報告されており、Caramazza ら（1973）は言語ごとに異なる音声カテゴリーの生成を主張する一方、Dijkstra ら（1998）は両言語の同時活性化を指摘している。また、2L1 バイリンガルの独自の特徴への検討は十分でなく（Simonet 2014）、さらに研究対象は主に英語系に偏っており、日本語話者に関する研究は不足している。これらを踏まえ、多様な 2L1 バイリンガルを対象とした検討が不可欠である。

本研究は、日本語を話す 2L1 バイリンガルのスピーチ・プロダクションに焦点を当て、成人および 7 歳から 12 歳の児童を対象に分析を行う。7 歳から 12 歳の年齢層は音素カテゴリー発達において重要であるにもかかわらず、先行研究では十分に扱われていない。参加者には、韓国語-日本語、中国語-日本語、英語-日本語の 2L1 バイリンガル（児童・成人）および日本語モノリンガル（児童・成人）を含む。

本研究の目的は、(i) 言語間相互作用の有無と程度の解明、(ii) 異なる 2L1 バイリンガル間のパターン比較、(iii) 2L1 バイリンガル発話に特有の特徴の検証、(iv) 子どもと成人の比較による 2L1 バイリンガルの言語発達の理解である。

3. 研究の結果

本研究の結果、以下の点が明らかとなった。

(i) 言語間相互作用の有無と程度

言語間相互作用については、本研究の分析範囲において顕著な証拠は確認されなかった。

(ii) 異なる 2L1 バイリンガル間のパターン比較

言語の組み合わせ（韓国語・中国語・英語と日本語）に関わらず、各バイリンガルは二つの第一言語を区別するために類似したアプローチを用いていることが示唆された（Liu 2025, 2026a)。具体的には、言語ごとに音声的特徴を調整し、対立を維持する傾向が確認された。

(iii) 独自の特徴の検証

2L1 バイリンガルは第二言語話者とは異なる特徴を示し、言語間の受動的な干渉ではなく、二言語間の音声的対立を積極的に強化する方向で産出を調整していることが明らかとなった（Liu 2025, 2026a)。また、その音声はモノリンガルの範囲内に収まる傾向があり、中間的な音声カテゴリーを形成していないことが示された。

(iv) 子供と成人の比較による発達理解

バイリンガル児童は 12 歳時点においても二つの第一言語の分化過程にあり、成人と比較して言語間の境界がより流動的であることが示唆された （Liu 2025, 2026b)。これは、音素カテゴリーの発達が当該年齢層において継続していることと整合的である。

また、これらの成果の一部は、国際学術誌における5本の論文発表および2件の学会発表として公表している (Liu 2025, 2026a, 2026b; Liu and Moon 2026; Liu and Takeda 2025a, 2025b)。

Liu,Sha.2026a. Cross-linguistic Consistency of Speech Rhythms: Evidence from Bilingual and Second Language Speakers. In Lars Meyer and Antje Strauss (eds.) Rhythms of Speech and Language: Physiology, Cognition, Culture. Cambridge: Cambridge University Press. 598-610.

Liu, Sha. 2026b. Phonemic Category Development in a Teenage Mandarin-Japanese 2L1 Bilingual: A Longitudinal Study with Monolingual and 2L1 Adult Bilingual Comparisons. International Journal of Bilingualism. https://journals.sagepub.com/doi/10.1177/13670069251408936.

Liu, Sha and Changyun Moon. 2026. The role of VOT and F0 in stop differentiation by 2L1 bilinguals with different language pairs: Beyond cross-linguistic interaction. Canadian Journal of Linguistics.

Liu, Sha and Kaye Takeda. 2025a. The Weight of VOT and f0 in English Stop Differentiation: 2L1 Bilinguals versus Monolinguals. Folia Linguistica.

Liu, Sha and Kaye Takeda. 2025b. VOT in English by bilinguals with 2L1s: different approaches to voiceless and voiced stops. Folia Linguistica 58(2). 327-360.

Liu, Sha. 2025. VOT in English by English-Japanese 2L1 Bilinguals: Distinct Methods for Voiceless and Voiced Stops. Phonology Forum 2025. Chuo University.

4. 研究者としてのこれからの展望

今後は、言語音声の多様性と普遍性を実証的に明らかにすることを、研究者としての長期的な目標としている。異なる言語背景を持つ話者のデータをさらに蓄積し、音声研究を通じて、言語習得、言語変異、およびコミュニケーションに関する理解の深化に貢献したい。さらに、研究成果を国際的に発信するとともに、教育活動にも還元し、研究と教育の双方を通じて社会に貢献できる研究者を目指したい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

本研究は、二つの第一言語を持つバイリンガルの音声発達の仕組みを明らかにすることを目的としています。近年、多言語環境で育つ子どもや生活する人々は増加しており、言語の違いを越えた円滑なコミュニケーションの重要性が高まっています。本研究の成果は、こうした社会における相互理解の促進や、言語教育の発展に貢献することが期待されます。

本研究の実施にあたり、ご支援いただいている皆様に心より感謝申し上げます。今後も基礎研究を通じて、多様な言語背景を持つ人々が共存できる社会の実現に寄与していきたいと考えております。

